

《 特別賞 北海道教育委員会教育長賞 》

夏休みディズニーランドのアトラクショントロッコに乗って風になったよ

函館市立万年橋小学校 4年 宮崎 蒼汰

【講評】ディズニーランドの楽しい思い出を、手際よくまとめたのはとても良かった。「トロッコに乗っ」た時の印象を「風になったよ」と表現できた点が特に良い。素直な感受性が歌全体に行き渡っている。感じたまま、見たままを自分の言葉で表現するのが短歌の大切なところだが、抜きん出ている作品として評価され、特別賞となった。

《 特別賞 北海道立文学館賞 》

リモコンを押してすぐくる静かさに耐えられなくてもう一度押す

北海道札幌白石高等学校 3年 東山テリィサ

【講評】この歌は、感じ方が新鮮である。リモコンを押すと静かな環境になる。そんな音のない世界は、不安な気持ちにさせる。いつもはさまざまな音が周囲を包んでいる。現代の生活のひとつの面を、鋭くとらえて作品にしたのが優れている。いまを常に新鮮な心でとらえるのは大切な事である。「耐えられなくて」が実感となっているところも良い。

《 特別賞 北海道歌人会賞 》

ペンギンがトンネルくぐってぴかぴかぴか空とぶようにおよいでいたよ

富良野市立麓郷小学校 2年 河野 智克

【講評】旭山動物園に行った時の印象をうたった。「ぴかぴかぴか」の繰り返し、その時を、生き生きと表現している。ペンギンがまるで空を飛ぶように水中を泳ぐ、そんな様子に驚いたのだろう。目の前に近づいて来た驚きを、子どもの目でとらえたのが良い。見たものをそのままに表現することは難しいが、しっかりとこの歌はうたっている。

《 特別賞 北海道新聞社賞 》

帰り道昔あそんだブランコが遊んでいけよとさびしくゆれる

立命館慶祥中学校 1年 伊藤 孫一

【講評】擬人化がうまくいった作品だ。昔は夢中で漕いだブランコも大きくなるにつれて、乗らなくなった。いつも、帰りにはあのブランコに乗ったものだ。ふと見るとブランコが「遊んでいけよ」と誘っている。その様子も寂しそうだ。ひとつの事柄に気持ちを込めてうたい、自然な気持ちを込めているところが良い。

《 優秀賞 》

パパと見たつきとせいざながれぼしひゅーきらりんとかがやいた

小樽市立稲穂小学校 3年 佐野 真美

【講評】 何ともキラキラした作品だ。「つきとせいざ」そして「ながれぼし」と、たたみこんだリズムがとても良い。特に「ひゅーきらりん」の擬音が効果をあげている。何よりもそんな夜空の様子を「パパと見た」からいっそう印象が深いのだ。自分の言葉でうたったのが特に良い。

お父さんいつになってもおきないよめざましどけいにわたしがなるよ

富良野市立麓郷小学校 2年 鈴木 梨央

【講評】 お父さんの様子をいつも良く見ているのだろう。疲れていてなかなか朝が起きられない。そんなお父さんを思っ「めざましどけいにわたしがなるよ」といじらしい気持ちを素直に表現した。子どものお父さんに対する優しい気持ちがこもった良い歌である。

五稜郭北の歴史を感じると星の形も美しくなる

札幌市立屯田南小学校 6年 佐々木 葵

【講評】 函館に行った時に五稜郭に寄った。形は、星形になっているのが印象的だった。北海道の歴史を目の当たりにした様子が、美しく目の前に迫ってくる。構成がしっかりしていて、良くまとまっている。短歌は三十一文字の中で言いたい事をまとめる事がとても大切である。

満天の礼文の海に光ってるいさり火の船一等星

利尻富士町立鴛泊小学校 4年 西島 一樹

【講評】 いつも見ている礼文の印象を子どもの目で良くまとめた。「いさり火」に注目し、礼文の空に輝く星に思いを寄せている。金星かデネブか、光り輝く星といさり火の対比が作者の心をとらえたのである。美しく、とても印象深い歌である。

一億年じかんをこえてやってきたアンモナイトよ大きな化石

札幌市立北野中学校 2年 齋藤 和佳

【講評】 アンモナイトを「一億年じかんをこえて」とうたったところが特に優れている。自分に引きつけてうたった優れた作品である。アンモナイトの巨大な化石にびっくりした印象を、一億年の時空を越えてきたと感じたのだ。そこがとても素晴らしい感じ方なのである。

生い茂る深緑に染まる草花をベールのように包む朝もや

余市町立東中学校 2年 木原 絵

【講評】 個性的なとらえ方の見事な作品である。感受性が優れている。初夏のむせるような草いきれの中で、今朝はもやが一面に立ち込めている。それがまるでベールのようだ、とうたったところが特に優れていて、印象も深い作品に仕上がっている。

夏夜の霜^{かや}嘆きの父母に降りそそぐ遺影で笑う君は十六

札幌聖心女子学院高等学校 2年 瀧田 小麦

【講評】 今年の瀧田さんは一段と研ぎ澄まされた感性を表現してくれた。「嘆きの父母」と表現し、遠くから遺影の君が笑っている。その子は十六歳だ、とうたう。作者の青春も君に寄り添うのだ。持っている表現を自在に使って思いを込める作者が目につかぶ。

着慣れない浴衣の帯の苦しさとカラリと鳴る下駄夏の思い出

北海道小樽工業高等学校 3年 市川 絢菜

【講評】 夏の夜の盆踊り、花火大会。下駄を履き、浴衣を着た思い出が、いまよみがえる。着慣れない浴衣だから、締めた帯が苦しかった。下駄もカラリ、と鳴った。みんな良い思い出だ。さあ今年はどうしようか。そんな思いを込めて夏の思い出に浸っている。素直な作品である。

《 佳作 》

しらぬかのうみできれいなはなびみたまたらいねんもかぞくでみたい

釧路市立鳥取西小学校 1年 山根 悠聖

【講評】 一年生の素直な感想をまとめたのはお手柄である。「白糠^{しらぬか}のうみ」と地名を入れたのも良かった。何よりも家族で見た海の上の花火だから、印象が深いのだ。無理のない表現も良い。

ラベンダーきれいにさいてるつうがくろかぜにゆられていいかおりだね

札幌市立琴似小学校 1年 山田 敬介

【講評】 素直な、純真な歌だ。ラベンダーのきれいに咲く通学路。風が吹いてきて、良い匂いを運んできた。「かぜにゆられて」が、良く見て、良く感じた表現になっていて優れている。

あまずっぱいハウスでそだったミニトマトパパがつくった赤いほうせき

富良野市立麓郷小学校 2年 横井 泰河

【講評】ハウス栽培で作ったミニトマト。パパが作ったトマト。味も形も宝石のようだ。父への気持ちがいじらしい。「あまずっぱ」さも「赤いほうせき」もパパが作るからなのである。

お父さん夜にトラクターあらってるわたしもたまにあそんでほしい

富良野市立麓郷小学校 2年 渡辺 理心

【講評】お父さんは、昼はトラクターを使って作業をする。夜はそのトラクターを洗うのだ。私とたまには遊んでほしい。お父さんに対する気持ちの素直に表れた良い作品だ。

雨の日になくなった母思い出し雨のようにしとしとと泣く

帯広市立帯広小学校 4年 水野 広穂

【講評】お母さんをしのぶ歌。母の亡くなったことを強く思っとうたった歌である。気持ちのたかぶりが「しとしとと泣く」に表れていて、雨の日だから涙が止まらないのである。

夕やけのテニスコートでボールうつオレンジ色のおひさまひかった

函館市立万年橋小学校 4年 西村 華

【講評】面白い歌だ。夕方にテニスのボールを打っていると、ボールに夕日が当たってオレンジ色に光った。「おひさまひかった」と表現したところが良かった。キビキビとうたった歌だ。

運動会キレッキレにおどるよさこいは動き大きくライオンみたい

函館市立万年橋小学校 4年 升田 さとみ

【講評】よさこいソーランは北海道の祭りに定着した。学校の運動会などでも踊られるようになった。「キレッキレ」とうたい「ライオンみたい」とうたうところが独特である。

学校で涙こらえたその日には母のとなりで玉ねぎきざむ

北海道教育大学附属札幌小学校 4年 都筑 暖和

【講評】学校で泣きそうになったが我慢した。家でお母さんの隣で玉ねぎを刻みながら、泣いた。そこが面白い。お母さんのそばだから、たまねぎ刻みながら、泣くのがいじらしい。

見えてきた大雪山の奥の空車窓に入る風もさわやかに

旭川市立光陽中学校 2年 大砂 百恵

【講評】大雪山をうたって、特徴を良くとらえた。「奥の空」が良い。遠く大雪山を見ながら、車を走らせると窓からは風が爽やかに入ってくる、初夏の北海道の大自然をうまくまとめた。

色褪せてあなたも景色も駆け抜ける心の隙間を秋風のように

旭川市立東陽中学校 2年 佐々木 ゆな

【講評】失恋の歌。輝いていた夏の景色も、あなたも、色褪せていまは秋だ。心のすき間を吹き抜けるように、秋風も吹いていった。切ない恋の心を冷静に自分を見つめてうたった。

ぐんぐんとのびるよのびるトロンボーン心に響け私の音色

北見市立光西中学校 2年 山田 彩寧

【講評】部活の吹奏楽なのだろう。生き生きとうたっている。私の心に響く様に、トロンボーンがぐんぐん伸びて心に響いてゆけ、と表現したところが生き生きとして特に良い。

八月の爆撃のがれ樺太の祖父がいて自分がいまいる

札幌市立星置中学校 1年 蠣崎 誉

【講評】八月になると、戦争の事が思われる。直接爆撃を避けて樺太から引き揚げてきたおじいさんがいてくれたから、今の自分がいるのだ、と感謝の気持ちがうたわれて素直な歌だ。

分岐点先が見えなく我に言うこれでいいのかこれでいいのだ

北海道岩見沢高等養護学校 3年 釣谷 悠太

【講評】心理的なことをテーマにした作品だ。分かれ道が来た時に、気持ちをしっかり持って、「これでいいのだ」と、決めて進んでゆこう、という決意の歌で他にはない作品となった。

おかえりと言うかのように自転車で待っててくれた赤色とんぼ

北海道札幌白石高等学校 3年 仲野 安彩子

【講評】自転車にアキアカネが止まっている。まるで私を待っているようだ。場面が読む者に伝わって、思わず作者の気持ちの優しさに、ほほえんでしまう。みずみずしい作品である。

傲慢な秋に吹かれた風鈴がやむなく鳴るのを夏は好まぬ

北海道札幌南高等学校 1年 清水 将也

【講評】 この歌も面白い歌だ。広い意味での擬人化だが、風鈴を人に見立てたところが面白い。「傲慢な秋」にやむなく鳴かされているのは迷惑なのだ、と独特な見方でうたって成功した。

さよならの声と一緒に夏風が帽子と君をさらって行く夜

北海道弟子屈高等学校 2年 一ノ戸 利雄

【講評】 寺山修司の青春の歌のような印象を持たせるなかなかの作品である。夏風がさらったのは帽子だけでなく、君もだ。私の元を去っていった君を思っとうたっている。

《 入選 》

あさがおのはじめのはっぱかわいいねハートのかたちこいしてるから

札幌市立澄川小学校 1年 眞田 花

【講評】 小学一年生でややおませだが女の子らしく、朝顔の芽を出した双葉がハートの形をしていることに注目して「ハートのかたちこいしてるから」と表現したところが子どもらしい。

かさなってお日さまみたいいちめんのかれ葉のマットあか・き・だいたい

札幌市立澄川小学校 3年 眞田 桃

【講評】 秋の一日、地面に敷き詰められた落ち葉を「かれ葉のマット」と捉え赤・黄・橙色の暖色の連想から「お日さまみたい」と表現したところが小学生らしくこの作品の良いところである。

あおいそらおやまがきえたでんせんがちいさくなつたくもがかくした

札幌市立平岡公園小学校 1年 古賀琥太郎

【講評】 青い空を背景にした山を雲が隠したことで「おやまがきえた」と表現したのであろう。「でんせんがちいさくなった」は直感でそう感じたのであろうか、面白い表現である。

ソーセージようじさかさよおばあちゃん思い出のこる夏の朝食

札幌市立円山小学校 3年 矢野 七雨

【講評】 夏休みに祖母の家にお泊りしたのであろう。朝食のソーセージに刺してあったつま楊枝が逆さだったというのであろう。こんなところに気が付くのも小学生らしいところで面白い。

あさごはんおいしかったよパンたべたバターたっぷりごちそうさま

札幌市立山の手養護学校小学部 3年 菅澤 蒼太

【講評】朝食がパン食なのは定着しているのであろう。「バターたっぷり」はやや作為を感じるが、食事の雰囲気を感じられ、「ごちそうさま」で締めたところは子供らしくて良いところである。

いねの波秋風とおりがサガサととんぼが止まる青いぼうしに

鷹栖町立鷹栖小学校 2年 佐々木貫太

【講評】小学二年生にしては上の句が大人っぽい。「ガサガサ」の擬音語もややこの作品の邪魔をしているようにも感じるが、「とんぼが止まる青いぼうしに」はよく見て表現されていて好感がもてる。

おじいさんビールをのんでおこられるこっそりのむよのんじゃったな

函館市立鍛神小学校 3年 川尻 優風

【講評】こっそりビールを飲む祖父を捉えたところが面白い。体のために禁止されているのであろうか。「こっそりのむよのんじゃったな」の下の句が子どもらしくて良い。

夏の雨かえるがぴょうとはねているさい後の葉っぱしっぱいしたよ

函館市立鍛神小学校 3年 竹内 莉悠

【講評】雨の中でかえるが葉の上を跳ねているのを詠んだ作品だが、最後に失敗したというよりも何の葉だったのか、またかえるを具体的に表現するともっと良かったのではなかろうか。

夏休み海でおよぐよひやけしたおふろに入ってすごきたいな

函館市立鍛神小学校 3年 仲田 大翔

【講評】夏休みに海水浴へ行った時の事であろう。浜辺で過ごし日焼けしたのである。「おふろに入ってすごきたいな」と素直に表現しているところが良い。

夏休み花いっぱいさいていてハチいっぱいきてミツをすう

函館市立鍛神小学校 3年 柳原 奈苗

【講評】夏休みになった喜びを感じる。普段はあまり目にしていない花や蜂に目を奪われて感動しているのであろう。「花いっぱい」「ハチいっぱい」もあまり気にならない。

秋のはっぱ風といっしょに旅をするいちょうにもみじきれいな形

函館市立鍛神小学校 3年 山下 瑠花

【講評】秋の雰囲気を感じさせる作品。イチョウやモミジの色づいた葉が風に運ばれている様子を「風といっしょに旅をする」と捉えたところが子どもらしくて好感がもてる。

暑い夏せんぷうきあびかき氷あつという間になくなりかけた

東川町立東川第二小学校 3年 矢部 恵衣

【講評】夏の暑い日に扇風機にあたりながらかき氷を食べている様子を作品にしたものだが、「あつという間になくなりかけた」と、子どもらしい表現になっているところが面白い。

オランウータン高いところでつなわたりちゃいろでふわふわふくろのフレンジ

富良野市立麓郷小学校 2年 高津愛葉音

【講評】旭山動物園で、オランウータンが高いところで綱渡りをしているのを見たのであろうが、その毛が「ちゃいろでふわふわ」の表現が子どもらしくて良い。

お父さんあまりあそんでくれないよよこにすわったあぶらのにおい

富良野市立麓郷小学校 2年 松下 楽

【講評】作者のお父さんは機械工の仕事をしているのであろうか。あまり遊んではくれないが、「よこにすわったあぶらのにおい」と感じたことを素直に表現して優しさも感じられる。

はじめてのぶたいこうえんとうきょうでないてわらって7才のなつ

北海道教育大学附属札幌小学校 2年 高倉小桃愛

【講評】東京で舞台公演をしたことを作品化したものであるが、何の舞台公演かわかるのもっと良かった。厳しい練習を重ねての舞台公演だったのであろう。「ないてわらって7才の夏」はやや子どもらしくない表現にも思われる。

日の光雲一つない青空は水辺のかがみの別の世界

帯広市立帯広小学校 4年 堀口亜仁衣

【講評】雲一つない青空が水に映っている様子を表現したのである。その美しさを「水辺のかがみの別の世界」と感じたことを素直に表現しており優れているところである。

あじさいは青紫のホテルだよ虫達せん用花かれるまで

北広島市立緑ヶ丘小学校 5年 三浦 花音

【講評】紫陽花の花を虫達専用のホテルと捉えたところが、この作品の優れているところであり、そこが小学校の高学年らしい。「花かれるまで」と言わないでどんな虫達なのかかわかるのもっと良かったと思う。

くもり空星達みんなかくれんぼ見つけられるかねるときまでに

札幌市立栄南小学校 6年 渡 勇輝

【講評】夜空の星を雲が隠してしまったのを星達の「かくれんぼ」と捉えたところがこの作品の見どころである。寝る時まで雲が晴れて星が見つけられることを願っているであろう。

夏休み太陽の下で鬼ごっこかげがのびたらさびしく帰る

札幌市立札幌北小学校 6年 児見山 仁

【講評】夏休みに友達と一日中鬼ごっこをして遊んだのであろう。日が陰ってきて影が伸びたのを見て帰ったのである。下の句の「かげがのびたらさびしく帰る」に気持ちがよく出ている。

海開きビーチバレーにスイカ割り水でっぼうで水のかけ合い

札幌市立札幌北小学校 6年 田中 佳太

【講評】海開きの日に海水浴場で遊んだことを子どもらしく素直に表現している。「ビーチバレーにスイカ割り水でっぼうで水のかけ合い」と並べて表現しているところが良い。

うつし光る小川の清流の冷たき欠片顔にあびせて

札幌市立札幌北小学校 6年 村田 三千花

【講評】月を映してキラキラ流れる小川の清流を見ての作品だが、その冷たい水のしぶきを欠片と捉え月の顔にあびせていると表現したところがこの作品の素晴らしいところである。

まっくらな光1つのやどのへや聞こえる小声「ねえねえもうねた？」

札幌市立常盤小学校 6年 須田 心

【講評】修学旅行の体験を詠んだものであろう。宿の旅館の部屋で消灯後友達同士でささやき合う経験は誰にでもあるはずである。「ねえねえもうねた？」の会話が生きている。

消灯後「すきな子いるの？」暴露会ドキドキとまらず笑いとまらず

札幌市立常盤小学校 6年 乗安 莉奈

【講評】これも前作と同様に修学旅行の時の体験談であろう。「暴露会」はやや強すぎるがこの作品も「すきな子いるの？」の会話が生きている。

ひらひらと木の葉が落ちて音が鳴るかさりと秋を教えてくれる

札幌市立星置東小学校 6年 元岡 樹玖

【講評】木の葉が落ちる音を聞いての作品である。「かさりと秋を教えてくれる」にふけゆく秋の静けさを表現して巧みである。

サーカスのピエロと初めてタッチしたもうじゅうショーははくりよくがある

札幌市立円山小学校 6年 小松 祐斗

【講評】札幌で公演された木下大サーカスを詠んだものであろう。ピエロと初めてタッチしたことと、猛獣ショーの迫力を詠んでいるがどちらか一つに絞り二首の歌にした方が良かったと思う。

オンネトー写真にとってもうつらないこの美しさ目にやきつける

札幌市立円山小学校 6年 橘 日向子

【講評】オンネトーは五色沼とも呼ばれその美しさから秘境湖のひとつに数えられている。写真でもその美しさは写せないの目に焼き付けるとうたったのである。高学年らしい発想で素晴らしい。

夕ぐれに仕事続ける父のかけ夕日にはえるトラクターかな

更別村立上更別小学校 4年 平山 晴大

【講評】農業に従事している父の姿をうたったものである。日が暮れてからもトラクターに乗って働き続ける父が夕日に映えてたくましく見えたのであろう。父に対する感謝の気持ちが感じられる優れた作品である。

水たまり太陽あたってきれいだなのでいてみると自分がうつる

中札内村立中札内小学校 4年 瀬藤 里彩

【講評】雨が止んだ後の水たまりに太陽の光が反射して美しく見えたのであろう。のぞいてみると自分の姿が映ったのである。小学生らしい素直な表現で好感がもてる。

サーカスのホワイトライオンかっこいいバイクが回る大きな円で

函館市立中部小学校 4年 岸波 梨世

【講評】これも木下大サーカスを見ての作品か。素直な表現で好感がもてるが、やはり一首の中に二つの事柄を入れない方がよい。ホワイトライオンの様子に絞るか、バイクの曲芸かどちらかにしてほしかった。

よさこいを上手におどれた運動会終わったときにはくしゅいっぱい

函館市立万年橋小学校 4年 垣内 愛

【講評】運動会でよさこいを踊った時の作品。何度も練習したのであろう。上手に踊れた喜びが「終わったときにはくしゅいっぱい」に表現されている。

草香る雲一つない空の下両手広げて夏抱きしめる

旭川市立東陽中学校 2年 石澤 奈々

【講評】どこか広い草原に立っているのだろう。上の句でだいたいの様子がよくわかる。下の句の「両手広げて夏抱きしめる」は良い表現で気持ちがよく伝わってくる。

演奏会水戸黄門にリズムとり笑顔が咲いた老人ホーム

小樽市立朝里中学校 2年 中井 涼葉

【講評】吹奏楽のクラブ活動で老人ホームを訪問した時の歌であろう。「リズムとり」「笑顔が咲いた」は上手にまとめていて上手いと思う。老人ホームのお年寄りたちの盛り上がりがよく伝わってくる。

帰り道そっとよりそい手を伸ばす君にとどいて小さな勇気

小樽市立菁園中学校 2年 藤島 周

【講評】「小さな勇気」を出すまでの作者の心の動きが良く伝わってくる。二人の仲がますます発展することを祈りたい。

君を想い眠れぬ夜に今日もまたお月様との恋の相談

北広島市立大曲中学校 2年 稲垣 彩乃

【講評】毎晩月の夜には月を眺めながら彼の事を相談しているのだろう。「お月様との恋の相談」上手くまとめてかわいらしさもあり一首が締まっていて成功した表現である。

朝起きてささやきかける潮の匂いテントを出ると宝石の海

北広島市立大曲中学校 2年 酒井 蓮

【講評】キャンプの朝の様子であろう。潮の匂いで目覚めてテントを出ると朝日を浴びた海がキラキラ光っており、それを「宝石の海」と捉えていて成功している。「潮の匂い」と「宝石の海」がマッチしている。

五月雨に打たれてしなる葉桜がゆがんで見えたガラス越しの朝

北広島市立大曲中学校 2年 中田 直宏

【講評】ガラス越しに見た葉桜が、五月雨に打たれてゆがんで見えた様子が丁寧にうたわれている。よくまとまった一首ですぐれた作品である。

教科書の端のページに書かれてる秘密の言葉消せない思い

北見市立光西中学校 2年 大多喜もえ

【講評】「秘密の言葉」とは何なのかわからないが、作者にとっては大切なものなのであろう。好きな彼の名前かほかのなにかだろう。「消せない思い」に複雑な心境をよくまとめている。

「行かないで」秘めた想いは口つぐみ君との日々を新たに築く

北見市立光西中学校 2年 柳橋 風香

【講評】「秘めた想い」を口をつぐんで決して言わない、私にとっての決断がよく表れている。「君との日々を新たに築く」などの表現が優れている。

鶴の舞白い雪原親鳥が綺麗に舞うなか幼き子鳥

釧路市立鳥取西中学校 2年 村山 大河

【講評】「鶴の舞」の「鶴」は作者の住まいが釧路であるから丹頂鶴なのであろう。雪原に舞う親鳥の横に幼い子どもの鳥がそれを眺めているのであろう。冬の丹頂鶴の親子の様子をよくまとめて短歌にしている。

傘をさし野外を歩き一億年ひとまたぎして昔の三笠

札幌市立北野中学校 2年 片山 弥優

【講評】三笠の恐竜博物館を見学しての作品か。アンモナイトなどの化石を見て、一億年の時の流れを感じたのである。それを「ひとまたぎして昔の三笠」と表現したところはなかなか巧みである。

霜焼けに肩を寄せ合い待つ列車1つのマフラー2つの想い

千歳市立北斗中学校 3年 倉島 和子

【講評】一つのマフラーを二人で巻いて駅のホームで列車を待っているのである。下の句を実に巧くまとめて良い作品になった。

6年間ずっと使っていたランドセル思い出の分キズもたくさん

苫小牧市立青翔中学校 2年 福田 悠生

【講評】小学校の時に使ったランドセルをしみじみと眺めている。その時代の思い出がたくさん詰まったランドセルにはその分傷も多いという。大人っぽい感覚でうまくまとめられている。

サクソスをもっと上手に吹きたくてケースを抱え坂道下る

室蘭市立港北中学校 2年 片桐 純玲

【講評】吹奏楽部でサクソフォンを吹いているのであろう。練習が終わって、ケースを抱え坂道を下る時、もっと上手に吹けるようになりたいという思いが湧いてきたのであろう。情緒のある良い歌になった。

ラインでは心の中は読みとれぬ明日も会いたい友の笑顔に

立命館慶祥中学校 1年 松賀 瞳直

【講評】ラインだけでは相手の心の中はわからないので、実際に友の笑顔に会いたいという素直な歌である。友達がたくさんいる喜びが伝わってくる。

亡き祖父と過ごした夏の楽しさを蘇らせる真っ赤なトマト

立命館慶祥中学校 2年 根岸 慶

【講評】今年も畑に真っ赤なトマトが実った。それを見ていると祖父がいた頃の楽しさがよみがえってくるのである。きっとそのトマトも祖父が育てていたのであろう。祖父に対する思いが表されて良い作品になっている。

部活動おわるころにはTシャツに個性あふれる汗の形

帯広北高等学校 1年 泉田 深愛

【講評】部活動が終わるころには、仲間のTシャツに汗の形が滲んでいるのである。その汗のそれぞれに個性があると捉えたところがこの作品の良いところである。

しゃがみこみ背中を丸めて見つめてる線香花火に輝く君の目

帯広北高等学校 1年 林 彩那

【講評】上の句で線香花火をしている君の様子が丁寧に生き生きとうたわれている。その君の輝く目に恋心を感じているのではなかろうか。高校生らしい新鮮な作品である。

道場の静寂吸い込み引く弓の離れて響く射抜く音

帯広北高等学校 1年 堀田 果林

【講評】弓道場の雰囲気がよく出ている。弓道の「動」と「静」の深さが迫ってくる作品である。下の句の「射抜く音」が体言止めでどっしりと落ち着いた感じがある。

夜九時に乗ってるバスの隣には僕が見つけた夏の大三角形

帯広北高等学校 3年 川端 一輝

【講評】何かで帰りが遅くなったのであろう。夜九時のバスの座席の隣は空いていて、窓の外を見上げると夏の三角形の星座が輝いていたのである。丁寧にうたっている。

広大な日勝の山の静けさにぬける夏風回るさえずり

帯広北高等学校 3年 佐藤 有沙

【講評】スケールの大きな作品である。日勝の山を吹き抜ける夏風の爽やかさが伝わってくるようである。鳥のさえずりも聞こえているのであろう。

水筒と重いカバンと譜面台高一の夏が汗をかいてる

北海道旭川工業高等学校 1年 福士 陸

【講評】吹奏楽部の演奏会であろうか、その会場に向かう途中の様子を表現しているのではなかろうか。一年生なので多くの荷物を持たされているのであろう。「高一の夏が汗をかいてる」という表現が生きている。

もし君が石ころぼうしかぶっても僕は見つける君だけを見る

北海道旭川工業高等学校 3年 関 蒼斗

【講評】もし君が「石ころぼうし」をかぶってわからないように変装していても、自分はきっと君の事を見つかるよという意味なのであろう。「石ころぼうし」は藤子・F・不二雄の漫画『ドラえもん』に登場するひみつ道具である。

ジジジと溶接の音トーチ持ち火花飛び散る慣れない操作

北海道小樽工業高等学校 1年 神田 侑汰

【講評】工業高校での実習の様子を表現しているのであろう。溶接の技術を習得するためになれない操作に戸惑っている様子が伝わってくる。特に初句の「ジジジ」の擬音語が生きている。

手を引かれ君と一緒に駆けていく夏の草原揺れる陽炎

北海道小樽工業高等学校 2年 窪内 渉

【講評】君に手を引かれて広い草原を駆けて行くのである。二人の爽やかな笑顔が伝わってくる。高校生らしいのびのびとした作品である。

広島は今日のように暑かった七十二年前八月六日

北海道小樽工業高等学校 3年 鈴木 優斗

【講評】八月六日の原爆記念日に、七十二年前広島に投下された原子爆弾のことを想像しているのである。年々風化されていく戦争の記憶をこのように作品として残してゆくことも必要ではなからうか。

愛してたなんて言葉も言えなくて離ればなれの花びらが散る

北海道札幌白石高等学校 3年 五十嵐結唯

【講評】恋の終わりを表現して、高校生らしい。下の句の「離ればなれの花びらが散る」と擬人化していて初句とよく照合している。

友達と関わるほどに消えてゆくほんとの自分素直な自分

北海道札幌白石高等学校 3年 佐藤 堇

【講評】自分の個性が友達と関わることで消えていくと歌っているのである。その中でしっかり自分を見つめており高校生らしい素直な作品である。

夏の熱遠くでゆるるしんきろう鮮やかにうかぶ過去の思い出

北海道滝上高等学校 3年 徳川 愛菜

【講評】夏の暑さの中で遠くを望むと蜃気楼が揺れているのである。それを見ていると過去の思い出が鮮やかによみがえってくるとうたっている。過去の恋人との思い出であろうか。

めずらしく君から LINE おはようとそれだけでまた好きになっていく

北海道津別高等学校 2年 仲田 小夏

【講評】 早朝に珍しく君から「おはよう」というラインがきた。たったそれだけだがまた好きになっていくという現代の高校生らしい様子がよく表れている。

いつのまにこけしにきのこゆでたまご定着してるわたしのあだ名

北海道津別高等学校 3年 紺谷はるか

【講評】 自分のあだ名が「こけし」「きのこ」「ゆでたまご」などと呼ばれそれが定着しているというユーモラスな作品。高校生活の中で生まれた題材を素直に詠んで好感がもてる。